

〈法政大学史学会特別活動報告〉「板澤蘭学資料」の整理作業の経緯とその現状

HARA, Kyoko / 原, 京子

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

82

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

2014-09-30

〈法政大学史学会特別活動報告〉

「板澤蘭学資料」の整理作業の経緯とその現状

原 京子

はじめに

板澤武雄氏（一八九五～一九六二）は、一九五二年（昭和二十七年）から法政大学文学部教授に就任し、没年である一九六二年（昭和三十一年）まで本学で教鞭を執っており、法政大学と深い繋がりをもつ日蘭交渉史の研究者である。

板澤氏の代表的著作は、『南方圏文化史講話』（盛林堂、一九三二年・一九四二年再版）、『阿蘭陀風説書の研究』（日本文化研究所報告 第三）（日本古文化研究所、一九三七年・一九七四年吉川弘文館から再版）、『日蘭文化交渉史』（法政大学博士論文、一九五四年）、『おらんだ風説書について』（大東急記念文庫、一九五八年）、『日蘭文化交渉史の研究』（日本史学研究所叢書）（吉川弘文館一九五九年・一九六一年・一九六九年・一九八六年再版）、『シーボルト』人物叢書四五（吉川弘文館、一九六〇年・一九六七年・一九七二年再刊・一九八八年新装版出版）などが挙げられ、他にも多数の著作を残している。岩生成一氏によると「それまでこの分野の先駆者村上直次郎・齋藤阿具両人の研究もあつたが、彼の日蘭文化交渉史の諸研究は、オランダの史料を精査駆使したもので、ことに画期的な優れた概観「蘭学の発達」をはじめ、「日蘭文化交渉に於ける人



図1 法政大学史学科に掲げられている板澤武雄先生の肖像

的要素」「阿蘭陀通詞の研究」「阿蘭陀風説書の研究」「辞書及び文法書の編纂と蘭学の発達」や「厚生新編訳述考」などの諸論文は、後の学位論文『日蘭文化交渉史の研究』にも取められ、いずれもその後の学界の蘭学史研究の発展に確固たる基礎を築いた重要な研究である」と高く評価されている。

このように大きな功績を残した板澤氏であるが、氏の没年の一九六二年（昭和三十一年）に、最後に教鞭を執った法政大学の史学科で、氏の蔵書の一括購入をおこなっている。この購入した資料群とその関連資料を「板澤蘭学資料」と呼称している。板澤蘭学資料は現在、法政大学の史学科で所蔵管理されているわけであるが、これらが板澤武雄氏の業績の礎であったことは言うまでもないだろう。

板澤蘭学資料は一九六二年度の購入時から五十年近くも経過した二〇〇七年度に、その資料の全貌を把握するようという学内か

ら通達を受けた。これをきっかけとして、板澤蘭学資料の本格的確認調査が始まり、二〇一二年から整理作業が実施されている。二〇一三年度には板澤蘭学資料の整理作業は法政大学史学会の特別企画準備積立金による事業として設定され、二〇一四年度の法政大学史学会の総会において、引き続きこの事業を行うことが承認された。

そこで、本稿では現在(二〇一四年八月時点、整理作業が継続中ではあるものの、二〇一三年度までの整理作業の経緯とその現状について、この場をお借りしてその報告をおこないたいと思う。

なお、この作業は、現在、渡辺穰(本学大学院博士課程単位取得)と田上慎一(本学大学院修士課程修了)と原とが中心となって作業しているが、今回は三名を代表して原が中間報告をすることとする。

一、二〇〇七年度の資料調査について

一九六二年に購入された板澤蘭学資料は手書きの台帳によって登録され管理がなされていた。この台帳は現存しており、台帳で確認したところ、購入当時から板澤蘭学資料は本学文学部史学科の管轄下にあったことが分っている。この時の購入資料数は一四二二点であった。

二〇〇七年度に、この台帳に記載されていた一四二二点を含む資産図書調査について本学から通達を受けた。この通達に従って、板澤蘭学資料の収納場所のすべてを確認することになったのである。ところで、調査が進むと一九六二年の購入後、板澤蘭学資料は何度か整理や活用がされていたことが分かった。それは台帳に記され

た一四二二点中のうち、数百点の資料から台帳番号を記載した某が見つかったことに依る。さらに調べると、購入当時の台帳番号順とは関係なく、保管されていたことが分かった。これは購入後のいつの時は不明であるが、資料を移動し、(なんらかの分類基準によるのか)収納場所別に分けていた。また、購入資料と同じ収納場所には板澤氏の関連資料も保管されていた。

二〇〇七年度の調査では、板澤蘭学資料の正確な点数を把握するまでには及ばなかったものの、ほぼ総ての収納場所を調べたことで、総点数は二〇〇〇点近くあることが判明した。

ところが、二〇〇七年度は、作業時間に限りがあったため、購入資料以外の調査については、まったく手つかずのまま調査は終了した。ほかにも確認が取れない購入資料が存在していたが、これらを探し出すことが出来なかったため、この確認はその後の課題として残された。

ただし、本学の通達に従い在庫が確認された購入資料については、資産図書として再登録をおこない、手書きで記された台帳も作業員によってパソコンへと入力して、デジタル化された。台帳のデジタル化は資料を管理する上で重要であったと思われる。そして何よりも、二〇〇七年度調査の大きな意義は、ほぼ総ての収納場所を調べたことで、その資料的価値を再認識したことにあるだろう。

二、二〇一二年におけるOPACシステムへの図書登録と資料整理について

板澤蘭学資料の中でも購入資料が大学の資産図書として再登録

がなされたことで、図書を中心にOPAC (Online Public Access Catalog) システムへ登録するよう本学から義務付けられた。OPAC システムに登録されるということは、単に資料を管理するという目的以外にも、図書館において公共利用に供されるオンライン蔵書目録が作成されるということであり、登録された資料は、容易に検索できるという利用者側からの利点がある。本学では登録に漏れがないように、とくに購入図書については遡及して、積極的にOPAC システムへの登録作業をおこなってきた。

さて、図書登録を行う際、問題になるのは図書と判断する線引きが難しいことである。ユネスコでは「図書とは、国内で出版され、かつ、公衆の利用に供される少なくとも四十九ページ(表紙を除く)以上の印刷された不定期刊行物をいう」と定義している。⁽³⁾ また図書館用語辞典編集委員会の『最新図書館用語辞典』によると、「思想、知識、感情、情報などを他の人に伝達するため、紙などに筆写、または印刷し、一定の厚さに製本したものと記されている。板澤蘭学資料には、図書と非図書の線引きが出来ない領域の資料も存在していたが(たとえば製本されたカタログ等)、そのような類は、仮に図書として取り扱ったとしても、最終的には登録をおこなっている本学図書館の判断に委ねることとした。

(1) 二〇二二年度(二〇二二年九月)の図書登録

前述した経緯により、板澤蘭学資料の購入図書を中心にOPAC システムへ登録をおこなうことになった。この作業は二〇二二年九月三日〜七日までの五日間、本学史学科教員の下、五名の作業員によっ

て、図書登録は、以下の通りにおこなわれた。

- ①まず、保管されていた収納場所別に付番をおこなった。⁽⁵⁾
- ②資料のすべてを、まず図書と非図書に分類をした。この時分類をおこなった資料点数は二三八点である。
- ③図書は、一九六二年の購入図書と関連資料の図書とに分けられた。
- ④一九六二年の購入図書と関連資料の図書には、貴重書用中性紙スリップ(以下スリップと略す)を挟んだ。スリップには「一九六二年度の台帳の資料番号、保管されていた収納場所の番号」を鉛筆で記した。
- ⑤一九六二年の購入図書台帳に「購入年度、一九六二年の登録番号、書名、シリーズ、巻次、著者名、史学科での分類(例えば、日本近現代史など)、史学科での請求番号、和書・中国書・洋書、装丁(和装本など)、史学科での登録番号」などOPAC システムに必要なデータ項目の追記をおこなった。
- ⑥劣化が著しい図書は、これ以上の破損や分離を防ぐため、応急処置を取らざるを得なかった。一時的な処置ではあるが、中性紙の薄葉紙(以下うすやうと略す)に包み、うすやうでこよりを作り、傷めないように軽く縛るという保管作業をおこなった。
- ⑦スリップへの追記が終わった図書は、順次ブックトラックに収納された。これらの図書はデータとともに本学図書館に移動して、その後、図書館の担当者によってOPAC システムに登録された。
- ⑧OPAC システムへの登録作業依頼の際、板澤蘭学資料の取扱い



図2 板澤蘭学資料の収納作業状況（2012年撮影）

について特別な注意が必要であった。

原資料を傷めないため「原資料にデータを記入しない」を原則に以下の二点について登録担当者に依頼をした。

⑦ 原資料に請求番号のラベルは貼らないで、資料に挟んだスリップに貼る。

⑧ 原資料に図書館の登録番号を打たないで、資料に挟んだスリップに打つ。

このように①～⑧までの登録準備をおこなった結果、一九六二年購入図書の三一八点のうち、三〇五点の資料がOPACシステムに登録された。この時、購入図書のOPACシステムへの登録は、ほぼ終了したものの、十三点の図書登録が間に合わなかった。また関連資料の図書（正確な点数は不明であるがおそらく数十点）についても、未登録のまま残された。⁶⁾

② 二〇一二年度（二〇二二年九月）の非図書と関連資料の整理

購入図書の登録準備と同時並行をして、非図書の整理がおこなわれた。

① 一九六二年の購入非図書にスリップを挟みこんだ。スリップには「一九六二年度の台帳の資料番号、保管されていた収納場所の番号」を記入した。

② 関連資料も、まず図書と非図書に分類することから始まった。関連資料のうち非図書と判断されたのは三九一点である。

非図書にはセットものが含まれるため、分離をしないよう中

性紙封筒に収納した資料もあるが、そうではない非図書にはスリッパを挟みこんだ。スリッパや封筒には「仮の通し番号、保管されていた収納場所の番号」を記入した。

③ 当面の間、大まかな分類項目を設けて整理をおこなうことにした。その分類項目とは「重要書類、近世(古典籍)、手書き原稿、手書き目録、ノート、戦前雑誌(紀要を含む)、戦前目録、戦前抜刷、戦前会報(戦前、戦後とも)、戦前パンフレット、戦前案内、戦前報告書、戦前小冊子、和雑誌、写本(二次史料)、写本(二次史料)」などである。このデータもスリッパに追記した。

④ 元の収納場所の番号を古文書用中性紙保存箱(以下中性紙箱に略す)に付番して収納した。

図書の登録作業と同時並行であったため、非図書については台帳のデジタル化までには及ばなかった。ただし、購入非図書で確認できた資料は六八九点、関連資料の非図書は三九一点であり、合計一〇八〇点に及んだ。

(3) 二〇二二年度(二〇二二年十二月～二〇二三年一月)の資料整理

二〇二二年の九月に購入図書の登録のほとんどが終了したものの、資料の確認調査、一〇〇〇点を超える非図書のデータ入力、関連資料の図書登録、図書データの精緻化、劣化した資料の修復、保存管理方法の選択など多くの問題が山積みになっていた。

板澤蘭学資料の登録図書のタイトル言語を確認しただけでも、取り扱いに高度な知識を必要とすることが分かる。登録図書には日本語、英語はもとより、オランダ語、中国語、フランス語、ドイツ語、

ラテン語などが認められ、板澤蘭学資料そのものが多言語にわたる資料群であることは明らかであった。また、和装本など古典籍資料も含まれており、資料の整理方法も精密にすることが要求された。正確な資料タイトル名を入力することさえ、辞書を引く程度では、対処ができない。当然、専門家からの指導が必須と思われたが、確認された図書と非図書とを合わせると総数は一三九八点にまで及んでいた。そのため資料を取り出すことさえ困難な状況下であり、このような整理段階では、専門家に指導を仰ぐことは出来なかった。専門家へ指導を仰ぐためには基礎資料の作成が急がれた。基礎資料として必要な作業は、仮目録の作成である。ほかに直接原資料を取り出すことなく、確認が出来るように、資料画像をスキャナで撮影してデジタル化し、最終的には仮目録とリンクさせたデータベースとして完成させることが必要と判断された。こうした問題を解決するため、二〇二二年度は、引き続き二回目の整理作業がおこなわれることになった。

二〇二二年十二月二十七日～一月七日までの七日間、史学科教員の下、四名の作業員によって、整理作業が以下の通りにおこなわれた。

① まず、前作業で完成したOPACシステム登録図書の三〇五点、すべての状態をみて劣化した資料を抽出した。これらの資料は修復製本の可否の検討を要するため、資料状態を追記して、劣化した資料は分けて収納した。

② 登録図書は取り出し易いよう中性紙箱に保管しなおした。保管箱に付番し、検索が出来るようにデータ化した。

③ 非図書については基礎となる仮目録の作成をおこなった。この

作業は、前回未入力であった項目「仮登録番号、タイトル名、種別、重要度、特記事項」のデータ入力から始った。

④ 関連資料のデータ化と並行して、一九六二年の購入非図書から順次、画像の撮影も始まった。撮影基準を作り、この基準に則り、スキヤナによる画像撮影が実施された。

非図書の画像撮影基準を要約すると以下の通りである。

【a・cに分類】

a 冊子（手書きノート等も含む）

b 逐次刊行物

c 封筒入り資料（封筒に購入図書の番号が付されているもの）

【項目別撮影方法】

a 冊子（手書きノート等も含む）

① 資料目録・表紙

「凡例などの資料の概要の分かる箇所（凡例等適切なものがない場合は撮影をおこなわない）」を撮影する。

② 抜刷

「表紙→送付状（資料に挟まっている場合に限る）」の順番で撮影する。

③ その他冊子

「表紙→目次→本文（二頁以上、章や項など区切りの良いところまで撮影）→葉書・書簡」等の順番で撮影する。

b 逐次刊行物は、以下の三項目に該当するか否かを確認してから、基準に則って撮影する（図3参照）。

① NDL雑誌索引・NDLサーチ・雑誌記事索引集成データ

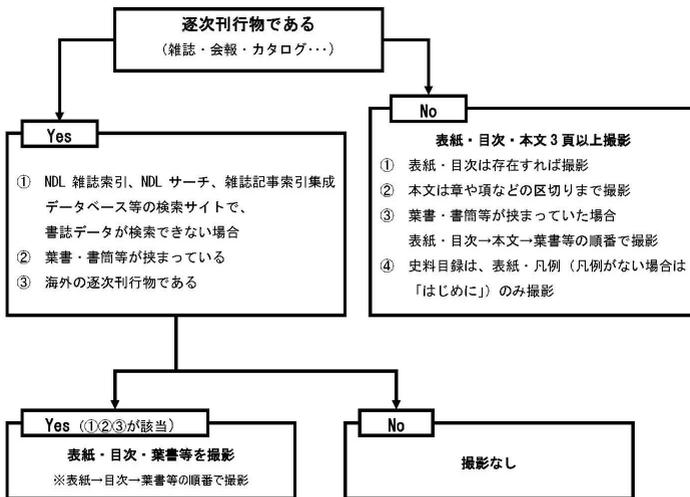


図3 板澤蘭学資料の非図書の画像撮影基準（逐次刊行物）

ベースで逐次刊行物に所収されている論文題目を検索できない場合、②逐次刊行物の間に葉書・書簡等が挟まっている場合、③海外の逐次刊行物であるのいずれかに該当した場合は、以下の順序で撮影する。

「表紙↓目次↓葉書・書簡等の順番」でおこなう（本文は撮影しない）。

c 封筒入り資料（封筒に一九六二年度の購入番号が付されているもの）

この項目に該当する資料は、所在を明らかにするためにすべて撮影をする。

「封筒↓目次↓本文（逐次刊行物の場合は撮影しない。本文撮影基準はa項の各項目に依る）↓葉書・書簡」等の順番で撮影する。

この画像撮影の基準を設けたことで、もし、非図書が逐次刊行物である場合で、さらに書誌データの検索が可能ならば、正確な資料データを集めることが作業員でも出来るようになった。また、専門家へ指導を仰ぐような資料の場合でも、この撮影基準を満たした画像ならば、判断材料として有効であると思われる。

こうして非図書の画像撮影とともに、一九六二年購入非図書のデータの修正がおこなわれた。また、仮目録のデータの修正が終了した非図書は三七四点にまで及んだ。

二〇一二年度の整理作業を終えた時点で、購入図書三八点のうち、OPACシステムへの登録は三〇五点で、購入図書の約九十六パーセントが終了した。また、非図書も基となるデータ入力完了

し、仮目録も三七四点まで作成され、画像撮影も同数が終了した。二〇一二年度の作業により、資料整理の方法や方向性が定まったといえるだろう。

三、二〇一三年度の整理（二〇一三年八月〜九月）

二〇一三年八月十日、十三日、九月七日の三日間、史学科教員の下、三名の作業員によって二〇一二年度からの作業が引き続きおこなわれた。

とくに非図書の仮目録の作成が急がれることから、スキヤナ二台とデジタルカメラ一台と機材も増やし、画像撮影をおこなった。この作業と並行して仮目録のデータの修正作業もおこなわれた。

この作業では、本目録作成も視野に入れて追記内容の充実を目指した。ほかにも各資料の状態や他大学図書館等の所蔵状況の確認を綿密におこなった。

二〇一三年度に確認された非図書の資料点数は一一三七点で、そのうち五一六点・総点数の約四五パーセントの画像撮影がこの年までに終了している。

四、おわりに ― 今後の作業にむけて ―

以上、雑駁ではあるが、二〇一三年度までの板澤蘭学資料の整理作業について報告をおこなった。二〇一四年度も引き続き、非図書の仮目録の作成と画像撮影を継続中である。整理作業の進展に伴い総点数が増加しているため、仮目録のデータの精緻化が急がれる。ほかにも、一九六二年度の図書・非図書の購入資料の確認調査、未

登録図書に登録作業、仮目録と画像データを統合したデータベースの作成など本目録を視野に入れた基礎資料の作成が進行中である。そのため、事実関係の認識で不正確な点があること、また重要な論点で洩れているものがあることを恐れるが、それは次の報告の際に補足し訂正することにした。

【謝辞】

整理作業にあたっては、片桐一男氏（青山学院大学名誉教授・法政大学史学会評議員）、山家浩樹氏（東京大学史料編纂所）、田中裕二氏（江戸東京博物館（当時））、古宮雅明氏（神奈川県立歴史博物館、今野農氏（法政大学キャリアデザイン学部兼任講師）、洋学史研究会、洋学史学会の皆様ほか、多くの方々から資料性や保存方法についてご指導をいただきました。そして、上司であった故山口緑郎氏（法政大学文学部資料室職員（当時））からは、多くのご支援をいただきました。山口氏が「板澤蘭学資料の整理作業について」大いに宣伝して来なさい」と励ましてくださったことが忘れられません。最後に本学史学科教員各位、法政大学史学会関係者各位、とくに名前は列記しないが、当時、作業の監督をしていただいた先生、作業に参加していただいた本学史学科室員、大学院生、学部生の皆様にご心より感謝申し上げます。

註

(1) 岩生成一「板沢武雄」『国史大辞典』一卷（一九七九年、吉

川弘文館）

(2) 二〇〇七年度に確認が取れていない三八九点については、現在確認調査中である。

(3) 一九八五年十一月一日第二十一回ユネスコ総会採択「図書、新聞及び定期刊行物の出版及び配布についての統計の国際的な標準化に関する改正勧告」

(4) 図書館用語辞典編集委員会『最新図書館用語辞典』（二〇〇四年、柏書房）

(5) 二〇〇七年度調査の際、板澤蘭学資料は箱に納められていた。いつ箱に納められたのかは不明であった。箱に収めた人物あるいは団体が、箱に収納した際に、資料をならかの基準に依って分類した可能性があった。しかし、二〇一二年度の整理開始の時点では、箱別に納めていた意味まで調べることができなかった。箱に分類した意味を解明できないうまま、これを崩して資料を取り出してしまおうと、箱に納めていた元の意味が失われてしまう。しかし、OPACシステムに登録するには、どうしても、資料を箱から取り出さなければならなかった。そこで元に収められていた箱に任意の番号をつけた。資料には、どの箱に入っていたのかが分かるように、スリップに箱の番号を記して、資料に挟んだ。こうすることで、資料に挟まれたスリップを見ただけで、元に収めていた箱が分かり、箱別の資料群のまとまりを復原できるように配慮をした。

(6) 現在、図書の確認調査をおこなっており、購入図書と関

連資料の図書も含めて、二〇一二年度以後増えている。そのため正確な図書点数は今後の報告としたい。

(7) 項目の分類基準については、別稿を用意して説明をおこないたい。

(8) 古文書用中性紙箱で資料を保存しても、資料の劣化の速度をやや遅らせることが出来るだけで、資料の劣化自体は防げない。しかし、収納スペースは限られているため、一時的処置を施した。

(9) この作業時、非図書点数についてはあくまで一セットの項目数を確認しただけに止まった。たとえば雑誌数冊が一セットで収納されている資料も多く含まれていたが、それも当面の間一点として扱うことにした。現在、非図書についても確認調査やデータの精緻化をおこなっているため、非図書の点数は増加しており、正確な点数は今後の報告としたい。